

# 形見の和歌―『鼠の草子』私注―

齋藤 真麻理

要旨 「鼠の草子」は異類婚姻譚という伝統的な主題を軸とし、民間伝承「鼠の浄土」「見るなの座敷」などとも通じ合う世界を内包する物語である。この室町物語は、人間が留まり得ない異郷への訪問譚として捉えることができる。

一方、「鼠の草子」後半に記された「形見の和歌」には、「源氏物語」をめぐる作者の教養が盛り込まれている。本稿では、「鼠の草子」の物語世界と、そこに見られる当時の学芸について考察してみたい。

荒にける鼠にやとく猫の綱

女三八人にかけて隠れ里

忍びつ、ものかしハきハ福おとこ

〔寛永十三年熱田万句〕第三<sup>(1)</sup>

隠れ里に住み、大黒天の使わしめとして衆人愛敬される鼠<sup>(2)</sup>であつても、煩惱は捨て切れぬものらしい。室町物語「鼠の草子」は、そうした古鼠の悲恋譚である。<sup>(3)</sup>

かつて、都四条堀川の院のほとりに、小畜に生まれついた我が身をかこつ古鼠<sup>(4)</sup>がいた。名を鼠の権頭という。齢百二十に余ろうかという老境にさしかかつていた彼は、とある雨中の徒然に名案を思いついた。人間と縁を結び、子孫の代には畜生道を逃れようというのである。

家臣の「穴掘りの左近尉」は主君の考えに賛同したものの、世の常の女性では釣り合わぬと主張した。左近尉の見るところ、権頭は、

昔、光源氏、夕顔の宿のたそがれ時の御たたずみ、その柏木の右衛門督、桜の木蔭に立ち添ひ、猫のきづなに目をかけし、その面影もよそならず、在五中将の交野の御野の桜狩、雪の花散る曙の、春のながめもよそならぬ、

(サントリー本「鼠の草子」)

という美男鼠だったからである。左近尉が推薦したのは、柳屋の美しい一人娘であつた。

ここに、程近き五条わたり油小路<sup>あぶらごうぢ</sup>に、柳屋がむすめ、年の頃十七八にもや候はん、われら、年月心にかけて、屏風

の切れ目、縁の下、壁にたたずむきりぎりすの虫食のすきふし、ぬけ穴、かやうの隙々ひらより、よくよくのぞき参らせ候ふが、これにましたる御かたちはなし、  
 (同右)

狙いは定まったものの、尋常の手段では人と鼠との結婚など叶うはずもない。そこで古鼠がすがったのは、清水の観世音であった。

清水観音は別名「妻観音」といい、配偶者を授けてくれる観音として絶大な人気を誇っていた。かの「ものぐさ太郎」が高貴な女性を見初めたのも清水の門前であったし、狂言にもしばしば妻観音の名が見える。

是はならの者でござる、某、此年になれ共、妻をもちませぬに依て、清水の観音は、妻観音にて有と申程に、清水に籠てござれば、西門に待てとの御夢想でござる程に、あれへ参つて待たうとぞんずる、(大藏虎明本「二九十八」)  
 異類婚を企てる古鼠にとつて、これ以上に頼もしい存在はなからう。

権頭が参籠している折も折、柳屋の娘が侍従の局を伴つて清水参詣に訪れた。観音は、いっそ両者を結びつけて物思いを晴らしてやろうとお考えになったか、権頭に夢のお告げを下された。春爛漫のその朝、権頭は首尾良く、音羽の滝のほとりで柳屋の娘と出会う。あたかも、

観世音にハ思はる、人

清水に籠て妻にころび合

(寛永十三年熱田万句「第四十」)

と詠まれたごとき、妻観音の計らいであった。

穴掘りの左近尉が婚礼調度の一切を整え、華やかな嫁入行列は権頭の屋敷へと到着した。数多の美しい障子に金屏風を立て回し、柳桜が植ええられた屋敷は桃源郷さながらである。盛大な婚礼の宴には、京都中の芸能の名人たちも駆けつけた。

しかし、幸福は長くは続かなかつた。ある日、権頭は姫に次のように言い置いて、清水寺へと出かけてゆく。われ、かやうの御かたらひ申すことも、清水の御利生にて侍り。その頃の宿願にて候へば、しばしの御暇を給はり候へ。清水へこそ参詣申し候はん。あひかまへて、この御座敷のほかへ御出であるまじく候ふ。

〔鼠の草子〕

けれども、姫はすぐに侍従の局を呼ぶと、障子のすきまから下々の様子を覗き見た。常々、屋敷の有り様に不審を感じていた彼女は、夫の言葉も腑に落ちず、ついに戒めを破ってしまったのである。二人の女が目にしたのは、夥しい数の鼠が走り回り、あらゆるものを食い散らし、荒らし回っているさまであつた。

すべてを悟つた姫君は、琴の糸を結んで鼠捕りの罟を仕掛けた。権頭はこの罟にかかつた。「ちっ」と一声上げるなり、絶命寸前と見えたが、左近尉に助けられてようやく命拾ひする。その隙に、姫君と侍従の局は逃げ出した。豪華な屋敷と見えていたのは、古い塚であつた。

残された権頭は涙にむせぶばかり、せめて姫の行方だけでも知りたいと思うが、占いの名手によれば、彼女は都の人と幸福な結婚をし、凶暴な猫まで飼っているという。それでも諦めきれず、巫女に姫の魂を呼んで貰つたところ、「御心にかけて給ふ露の御心も残り候はば、猫殿をかけて参らせん」と言われる始末、権頭は形見の道具を眺めつつ、それを和歌に詠んで泣くよりほかなかつた。

とうとう権頭はこれを悟りの縁にしようと出家し、「ねん阿弥」となつた。導師は五戒を保つよう諭したが、煩惱を捨て切れぬ権頭は、少しずつ戒律を緩めてくれるように懇願するのであつた。

高野山への道中、ねん阿弥は、二百歳余りになる猫の坊に出くわした。猫も最愛の妻と別れて出家遁世し、殺生を断つた身であつたから、猫と鼠は連れ立って、高野山に上つていったという。

【鼠の草子】は室町後期から江戸初期にかけて成立し、本文の系統は概ね四種に分類される。第一系統に属する天理大学附属天理図書館蔵の絵巻は、古態を留める作例として知られる。第二系統の桜井健太郎氏本(註)は絵巻断簡、物語の筋とは無関係な鼠の出産場面などを含む。第三系統は最も多くの作例が残っており、サントリ―美術館、ニューヨーク公共図書館スペンサー・コレクション、東京国立博物館、篠山市立青山歴史村に現存、詞章や挿絵の構図に殆ど異同はない。江戸初期に制作され、絵草紙屋で売られた伝本であろうと推測されているが、それほど広く親しまれた本文だともいえよう。第四系統には天理図書館本(別本)がある。

いずれにせよ、古鼠の命運をかけた計画は、異類婚姻譚の常として失敗に終わる。まして「見るな」の禁忌が破られた以上、破局は免れ得ない。清水観音の示現を蒙りながら、なぜこの結婚が破綻したかといえ、それは妻観音の力を以てしても、人と異類との間には決して越えられない、越えてはならない境界が存在したからである。鼠の清水參籠は、その事実を強調する役割を果たしている。他方、柳屋の娘が最後には良縁に恵まれる点、妻観音の靈験は確かに発揮されており、【鼠の草子】は定石通りの展開を辿る物語といつてよい。

【柳屋】は都で評判の酒屋であったと思しく、多くの文献にその名が記録されている。

柳ト云ハ酒ゾ、唐土ニモヨイ酒ヲ柳ト云ゾ、日本ノ京ニモ云ゾ、

〔湯山聯句鈔〕「虞韻」

五條坊門西洞院酒家曰レ柳也。毎月於ニ公方一献ニ六十貫美酒一也。一年之内。以上七百二十貫文。以為二月課云。

〔蔭涼軒日録〕文正元年七月四日条

酒者柳一荷。

(「尺素往来」)

三ほう院より折五こう。やな木五かまいる。

(「御湯殿上日記」文明十四年二月十四日条)

四日のあひだ、毎日折二十合、柳五十かづ、賄ひ申すべきむね、京中へあておほせ、則、わうごん二百両くだしたまひけり、

(甫庵本『信長記』十二「北条氏政あらかぢめ信長公の幕下に属する事」)

やなぎの代。古酒百文別三杓。新酒百文別四杓。

(「諸芸方代物附」)

「松の酒屋や梅つぼの、柳のさげこそすぐれたれ」(大藏虎明本「餅酒」と歌われるほど、柳屋といえは都に知らぬ者のない名店であつた。これほどの大店ならば、福神の使者たる鼠の相手として不足はない。しかし、権頭が初めから「小路の柳屋」を選んでいた点には注意が必要である。

なぜ、鼠は柳屋に狙いを定めたか。それは、この店が「油」小路にあつたからだと思ふ。「油」の付合は「鼠」(「毛吹草」『俳諧類船集』ほか)、油は鼠の好物であつた。

さらば氣つけをちとねぶりて帰らんといふまゝに、飢鼠短髪にのぼると老坡もいはれしごとく、灯台へ走り上がり、油つぎに口さしよせて思ふまゝに吸い取りて、果てには灯心を引ほどに、火すでにけちぬ、

(ケンブリッジ大学図書館蔵「鼠のさうし」)

寛永十三年(一六三六)「熱田万句」には、

ひとへに鼠あれてうたてさ

そさうにや入る俵の油かす

(「熱田万句」第五十四)

と見える。天理図書館蔵「鼠の草子」(別本)では、洗顔中の女鼠が「さてく顔より油が出てぬらめくく」と呟くが、この台詞は油好きの鼠が口にしてこそ面白い。抑も、権頭自身が出家直後にこう発言している。

第二偷盜戒は、御存知のごとく、蔵／＼部屋／＼の傍らにて、俵兵糧、食るあけて、こぼれ物をば御めんあれ、其外、御寺方に住まひせば、おこが、栗、柿、あめ、おこし、胡桃、納豆、香のもの、灯の油づゝ、余る所を御めんあれ、  
(東博本「鼠の草子」)

鼠が「油小路」に住む姫君を狙うのは、油を好む鼠にいかにも相応しい展開であつた。

また、都を南北に貫く油小路には、様々な店が軒を並べていたはずである。その中からなぜ、特に柳屋が選ばれたのか。鼠にとって、大量の米を扱う酒屋との縁結びは、なるほど好都合には違いない<sup>10</sup>。だが、この店が「柳」を冠した名であることに注目したい。

天理図書館本「鼠の草子」の挿絵には、婚礼の宴の準備に忙しそうな鼠たちが描かれる。その中の一匹の女鼠「はる」は、自らの美貌を誇つて言う。

我々をば、殿様をはじめ、皆々も「ふり良し」と仰せられ候。顔も柳顔にて候とて、御ほめ候、嬉しやく、

(天理図書館本「鼠の草子」)

「柳顔」とは美しい細面の譬えである。細面の鼠が主人公だからこそ、「鼠の草子」の作者は鼠に柳屋を取り合わせたのではなかったか。

蓋し、「鼠の草子」の「油小路」「柳屋」は当時の名店が偶然に物語に顔を出したのではない。鼠の物語に相応しく、作者が意識して選び取った結果だと思ふ。このように、「鼠の草子」という室町物語は、作者が仕掛けた言葉遊戯に満ちている。

華やかな婚礼場面を過ぎると、一転、物語は悲劇へと急展開してゆく。

「見るな」の禁忌が破られた途端、幸福な日々は瓦解した。挿絵には難道具を思わせる可憐な形見の品々が描かれ、古鼠の悲嘆を鮮やかに彩っている。

残された道具類は、天理図書館本では、琴、箱、琵琶、鏡、硯匣、櫛、枕、貝、結び文、扇、元結、衣、伏籠、継子立テノ碁石、碁盤、細帯、双六盤の十七品、これに和歌が一首ずつ詠まれている。サントリー本では、帯、琴、手箱、元結、袂、鏡、扇、櫛、団扇、碁（挿絵には碁盤と碁笥）、硯匣、綿（挿絵には塗桶と綿）、貝桶、火取（挿絵には火取と火箸）、鬘、手拭の十六品について一首ずつ和歌が添えられる。

両系統を合わせると、琴、箱、琵琶、鏡、硯匣、櫛、枕、貝、文、扇、元結、衣、伏籠、碁石、碁盤、帯、双六、袂、団扇、綿、火取、鬘、手拭の二十三種の品が和歌に詠まれていることになる。このうち十種の品は両系統に重出するが、和歌の趣きは全く異なる。

まず、天理図書館本の和歌を一覧してみたい。

(琴) 世の中のおふ別れとは知らざりし ことのねにさへ恋しさぞます

(箱) このはこのよしみの月もこがくれて 恋しき人ぞつけてあくるに

(琵琶) 別れぬるそのひはいまだ来たるめり 我がまつ人のなど来ざるらん

(鏡) 見るたびにいと、おもひのます鏡 くもる心の晴れぬ物かは



(硯匣) むらさきの硯の石はかわくとも 干されぬ袖は身のおもひある

(櫛) 青柳の乱るゝ糸のくるからに けづりて春の風やとくらん

(枕) しまったへの枕さびしきよもすがら 一人伏見の里をとばや

(貝) 思ひいづるかおもなぎさのよするてふ みるめならばや人の面影

(結び文) この文のはこねぞ近きあしがきの かみもこひをばあわれとも見よ

(扇) 我が思ふ人にあふぎの風もがな 身にしむとてもなどか苦しき

(元結) 思ひきや結びそめしをはつちぎり 物思ふべきもとひなりけり

(衣) あわれげに涙の露のひまもがな こよひ衣の袖を干さまし

(伏籠) たき物のふせごのしたにたつけぶり くゆるばかりにやるかたもなし

(継子立テノ碁石) 世の中にありやなしやの継子だて こひしとばかり思ふなりけり<sup>1)</sup>

(碁盤) とはれずは生きてかひなき命ぞと 死なれぬ碁さへ願ふつらさよ

(細帯) 思はれぬ身は数々のなか／＼に 結びあはぬぞ悲しかりける

(双六盤) すぐろくの向かひの石をひきかねて かゝりゆくこそ悲しかりけれ

櫛の歌は、形見を詠じた悲痛な歌とは見え難い。琵琶や元結、碁石の和歌をはじめ、全体に物名歌の興趣を備えており、単純な言葉遊びの歌となっている。

他方、サントリー本ではそうした傾向は薄れ、天理図書館本とは異なつた詠みぶりの歌が列挙されている。

(帯) 憂き事をひとへにぞ思ふ三重の帯 めぐりあはんも知らぬ身なれば

(琴) 今とてもかはらぬ庭の松風を しらべしことは昔なりけり

(手箱) うらしまがそのいにしへの玉手箱 あけての後ぞ思ひ知らる、

(元結) ながき世を結びこめつる元結を 見るにつけても泣く涙かな

(衾) とにかくに泣くよりほかのことぞなき この人からを見るにつけても

(鏡) 面影のとまるならひのありとせば 鏡をみても慰めてまし

(扇) 君まさで涙にしづむ憂き身ぞと 扇の風よ吹きも伝へよ<sup>(12)</sup>

(櫛) むばたまのその黒髪をかきなでし つげの小櫛も今はなにせん

(団扇) 露のまも忘れがたき面影の 命のうちは身に添ひてまし

(碁) みだれ碁を十廿三十と数へにし その面影の忘れぬかな

(石) 結びにし算の水も石ぞかし かきたへて見る形見ばかりを

(綿) 塗桶にかゝりし人はしらぬひの 筑紫の綿も今はなにせむ

(貝) 争ひて我遅れじとあひおひし 貝の名きくも憂き形見なり

(火取) 身はかくて富士のけぶりのたき物の ひとり残りてくゆるなりけり

(鬘) 朝顔の花のゆかりの玉かづら かけてもよしや露のちぎりは

(手拭) 先立つは涙成けりかけをきし このてぬごひを見るにつけても

これら形見の和歌は、物尽くし、道具尽くしの趣向といつてよい。貝桶や手箱、元結箱、火取の香炉、帯の箱、櫛の箱は実際の婚礼調度であつて〔嫁入記〕ほか、『猿の草子』では、猿の姫君は『源氏』『狭衣』などの物語と共に、長持、十二の手箱、角盥、半插、櫛箱、金壺、硯箱、文台、筆台、懐紙、紙おしろい、畳紙、塗桶、貝桶、寄りかかり、櫛、毛拔、鉢、油桶、嗽茶碗、香炉等々の婚礼道具を携えて輿入れする。『鼠の草子』の形見の品々もまた、婚礼調度

尽くしのようにも見える。この部分については、中世に流行した扇絵などとの関連性も考えられているが、品々が選ばれた根拠や和歌の典拠、類想歌の有無は不明のままであった。

しかし、中世に数多く編纂された類題集によれば、これら形見の品の多くは、調度や服飾に関する歌題であった。試みに、『古今和歌六帖』【新撰六帖題和歌】『夫木和歌抄』を一見してみよう。

『古今和歌六帖』第五「服飾」の歌題のうち、たまくしげ、たまかづら、もとゆひ、くし、かがみ、まくら、ころも、ふすま、おび、ひとり、ふみ、こと、あふぎ、わた、以上十四品は『鼠の草子』の品々と一致する。同様に、『新撰六帖題和歌』第五帖には、たまくしげ、たまかづら、もとゆひ、くし、かがみ、まくら、ころも、ふすま、おび、ひとり、ふみ、こと、あふぎ、わた、以上十四品、『夫木和歌抄』の歌題には、文、硯、琴、鏡、枕、櫛、鬘、火取、衣、帯、綿、以上十一品が挙がっている（卷三十二雑部十四雑物上・卷第三十三雑部十五雑物下）。『夫木和歌抄』【玉】の項には「玉手箱」の歌も入っているから、合計十二品と数えても良い。即ち、『鼠の草子』形見の品の大半は類題集が収録した歌題であって、和歌に心得のある人ならば、当然、こうした歌題は承知してははずである。これらを詠んだ和歌にも通じ、実作することもあつたらう。

さらに、類題集を活用して成った付合集、例えば『藻塩草』では、卷十六「人事部」、卷十七「人事雑物并調度部」、卷十八「衣類部」に、碁、双六、硯、扇、和琴、琵琶、箱、鏡、櫛、鬘、枕、火取、衣、帯、綿、以上十五品が列挙されている。『連珠合璧集』によれば、琴、玉手箱、琵琶、鏡、硯、櫛、枕、貝、書（玉づさ）、扇、衣、碁、双六、衾、綿、火取、玉かづら、以上の十八品が「琴トアラバ」の形で見出し語として掲出され、『鼠の草子』と一致する。従って、『鼠の草子』の形見の和歌については、類題集の歌題や俳諧連歌の付合を視野に入れて考察する必要がある。とりわけ、第三系統に属する本文は付合と関係が深いように思われる。

以下、サントリ一本に拠りながら、その具体を検討してみたい。

憂き事をひとへにぞ思ふ三重の帯 めぐりあはんも知らぬ身なれば

〔鼠の草子〕

帯トアラバ むすぶ みち (中略) 三重

〔連珠合璧集〕三十一「衣類」

【鼠の草子】は「帯」の歌を詠むにあたり、「三重」を付合として詠み込んでいる。さらに「連珠合璧集」から付合を抄出すると、

琴トアラバ かきなす 引 手なれ 松風

玉手箱トアラバ ふた 身 あくる あふ 浦しまが子 我身はなれぬ源

鏡トアラバ くもる みがく 面影 うらみ 玉手箱

硯トアラバ きる 紫の石

櫛トアラバ つげ つま さす 引 はをしげみ つくし

貝トアラバ ひろふ おほふ 鹽 ふところ あはする 玉忘

扇トアラバ をる さす 妻 ひろぐる

碁トアラバ うつ みだれ いき死 かちまけ 石 濱 白黒 をのゝえ 山人 うつせみ源 軒ばの萩同

かけ物 却

石トアラバ しづく 碁 双六

綿トアラバ かつぐ ふし しらぬいのつくし

火取トアラバ 薫物 蟲 はい ふせ籠 人をねたむ源 まきばしら同

玉かづらトアラバ 女のかくる玉かづらとかよはして付くべし。 つくし源 夕顔同

〔連珠合璧集〕

などであつて、その付合はしばしば鼠の和歌に用いられている。

加えて、サントリー本『鼠の草子』では、「碁」の次に「硯」の和歌が置かれ、「石」が詠み込まれている。『連珠合璧集』『石』の付合は「碁」、形見の和歌の配列にも付合に基ついた連想が働いた可能性があろう。第三系統に属する『鼠の草子』は、類題集や俳諧連歌の付合を駆使して、形見の和歌を創作したものと推測する。

四、

鼠の光源氏とでも称すべき美男の権頭は、『源氏物語』をも詠歌の素材とした。そのことは、鏡の和歌に最も顕著に看取される。

面影のとまるならひのありとせば 鏡をみても慰めてまし

〔鼠の草子〕

この一首、『源氏物語』須磨の巻に見える和歌と酷似する。須磨への隠棲を決心した源氏が、紫の上と和歌を贈答する場面を引く。

位なき人はとて、無紋のなをし、中くいとつかしきを着給てうちやつれ給へる、いとめでたし。御髪かき給とて、鏡台に寄り給へるに、面瘦せ給へるかげの、我ながらいとあてにきよらなれば、「こよなうこそおとろへにけれ。このかげのやうにや瘦せて侍。あはれなるわざかな」との給へば、女君、涙一目浮けて見をこせ給へる、いと忍びがたし。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ  
と聞こえ給へば、

別れても影だにとまるものならば鏡を見てもなくさめてまし

(「源氏物語」須磨)

紫の上の詠歌は源氏の心に深く刻まれ、明石の巻では、源氏の消息の中に再び引用されている。

「鏡を見ても」との給し面影の離る、世なきを、かくおほつかなながらや、と、こゝらかなしきさまのうれはしきはさしをかれて、

(「源氏物語」明石)

この歌は「源氏小鏡」など源氏の梗概書にも掲載されるところとなり、些かなりとも「源氏物語」に関心を持つ人物であれば、先刻承知の一首であった。「扇の草子」にも所見、後には俳諧の付合集にも収載されているほど、紫の上の歌は人口に膾炙した。

一鏡　ます鏡　ますみの鏡　朝鏡　鏡のかけ(中略)　落涙　物おもひ(中略)　須磨浦

身ハかくてさすらへぬとも君かあたりさらぬ鏡の影は離れじ

是ハ源氏の御歌也、すまへさすらへの御時、紫の上と鏡を見かハして、名残をおしみてよミ給ふ也、

別れても影だにとまる物ならハ鏡をミてもなくさみなまし　紫の上

(延宝七年刊「付合小鏡」雑部三十一「鏡」)

「鼠の草子」が紫の上の歌を転用したことは明白である。歌の趣向や仮定表現は無論、下の句に至っては、紫の上の詠歌と「鼠の草子」の和歌とは全く同形である。第三系統に属する「鼠の草子」は「源氏物語」に通じた人物の作に相違ない。形見の和歌については、「源氏物語」享受の視点からも再検討を要する。

「鼠の草子」「琴」の和歌も「源氏物語」に基づく一首と考えられよう。

今とてもかはらぬ庭の松風を　しらべしことは昔なりけり

(「鼠の草子」)

形見の琴、変わらぬ松風の音、といえば、「源氏物語」明石の上の物語が想起されてしかるべきである。<sup>19)</sup>

「さらば、形見にもしのぶばかりの「ことをだに」との給て、京より持てをはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかに掻き鳴らし給へる、深き夜の澄めるはたとへん方なし。(中略)あくまで弾き澄まし、心にく、ねたき音ぞまされる。この御心にだに、はじめてあはれになつかしう、また耳馴れ給はぬ手など、心やましきほどに弾きさしつ、飽かずおぼさる、にも、月ごろ、などしるても聞ならさざりつらむと、くやしうおぼさる。心のかざり行先の契をのみし給。「琴は又、掻き合はするまでの形見に」とのたまふ。おんな、

猶ざりに頼めをくめるひとことを尽させぬ音にはかけてしのばん

言ふともなき口ずさびをうらみ給て、

あふまでのかたみに契る中の緒の調べはことにかはらざらなむ

「この音達はぬさきにならずあひ見む」と頼め給めり。

〔源氏物語〕明石

一旦の別離を経て、源氏は明石の上と姫君、尼君を都へ呼び寄せる。大堰の住まいは明石の海辺に良く似ていた。寂しさの余り、明石の上がああ形見の琴をかき鳴らすと、「松風はしたなく響きあひたり」、尼君と明石の上は歌を詠み交わす。

尼君ものがなしげにて、寄り臥し給へるに、起き上がりて、

身をかへてひとりかへれる山里に聞きしに似たる松風ぞふく

御方、

ふる里に見し世の友を恋ひわびてさえづる琴を誰かわくらん

〔源氏物語〕松風

源氏と明石の上との再会も、琴と松風によって印象的に描かれる。

ありし夜のことおぼし出でらる、おり過ぐさず、かの琴の御琴さし出でたり。そこはかともなくものあはれなるに、

え忍び給はで掻き鳴らし給ふ。まだ調べも変はらず、ひき返しそのおりいまの心ちし給ふ。

契りしに変はらぬことの調べにて絶えぬ心のほどは知りきや

女、

変はらじと契しことを頼みにて松の響きに音を添へしかな

〔源氏物語〕松風

言うまでもなく、こうした描写は『拾遺集』雑上に収める斎宮女御の詠「琴の音に峰の松風通ふらしいづれのをよ  
り調べそめけん」を踏まえるものである。しかし、『鼠の草子』の和歌には変わらぬ松風と琴が詠み込まれている点、  
直截に影響を及ぼしたのは『源氏物語』であつたと思う。『源氏小鏡』には明石の尼君の詠が収載されること、「形見  
の琴」「松風」が源氏寄合であつたことを思い合わせれば、その蓋然性はより高くなるだろう。

さびしくあはれなれば、明石を源氏の出で給ひしおり、都より持たせ給ひて候ことを、あふまでの御かたみとて、  
をき給へりしを取り出して、ひきて、

身をかへてひとりかへれるふるさとにき、しににたる松かぜぞふく

と詠みしゆへなり。そのことは。

みやこにかへる。かたみの琴。松かぜ。大井かわ。

など、いふ事をつけべし。

（京都大学本『源氏小鏡』十三 松かぜ）

## 五、

『鼠の草子』『衾』の和歌については、「人がら」という表現が目を引くのではなからうか。



とにかく泣くよりほかのことぞなき　この人から見るにつけても  
〔鼠の草子〕

権頭は何に基づいてこの一首を詠んだのか。答えは恐らく、『源氏物語』空蟬の巻である。

源氏が垣間見しているとも知らず、空蟬は軒端の萩と基を樂しむ。やがて源氏の氣配を察した彼女は「生絹なる単衣をひとつ着てすべり出で」てしまふ。源氏は「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣」ばかりを取つて二条院へ戻つた。「ありつる小桂をさすがに御衣の下に引き入れて大殿籠」るものの寝つかれず、「かの薄衣は小桂のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして」恋の形見とした。空蟬には次のような一首が源氏から届けられた。

空蟬の身をかへてけるこのもとに　なを人がらの懐かしきかな  
〔源氏物語〕空蟬

この和歌は、『物語二百番歌合』や『風葉和歌集』巻第十五、室町物語『十本扇』にも引かれるなど、人々の耳に親しい詠歌であつた。

十九番

左　うつせみの身をかへてけるこのもとになを人がらのなつかしきかな、とかきつけたまへるを見て

空蟬尼公

うつせみのはにをくつゆのこがくれて　しのびくぬる、そでかな

右　なつころ源じの宮の御まへにて、こずゑのせみのなきいでたるをきかせ給て

こゑたて、なかぬばかりぞものおもふ　身はうつせみにおとりやはする  
〔物語二百番歌合〕<sup>(20)</sup>

六条院、なを人がらの、とのたまはせたるかたつかたに

うつせみのあま

うつせみの葉にをく露のこがくれて　しのびくぬる、袖かな  
〔風葉和歌集〕

松とせみとをかきたるはいかにと、問はせ給ひ、ひらきければ、源氏の歌とみえて候、

空蟬の身をかへてけるこのもとなを人からのなつかしき哉

〔十本扇〕

【鼠の草子】が挿絵に夜具を描き、「人がら」を詠み込んだ和歌を配したのは、【源氏物語】空蟬の和歌を踏まえた創意だつたと考える。

【鼠の草子】「碁」の和歌も、空蟬の巻と無縁ではあり得ない。

みだれ碁を十廿三十と数へにし その面影の忘れぬかな

〔鼠の草子〕

【源氏物語】では、碁の勝負の後、騒々しいほどはしゃいで石を数える軒端の萩と、落ち着いた風情の空蟬とが対照的に描写される。たしなみ深い空蟬の様子に、一人、源氏は心を惹かれることになる。

碁打ちはてて、闕さすわたり、心とげに見えてきはくどさうどけば、奥の人はいと静かにのどめて、「待ち給へや。そこは持にこそあらめ、このわたりの却をこそ」など言へど、「いで、このたびは負けにけり。隅すみの所、いでく」と指をかゝめて、「十とせ、二十はた、三十みそ、四十よせ」などかぞふるさま、伊予の湯桁もたどくしかるまじう見ゆ。すこし品をくれたり。

〔源氏物語〕空蟬

鼠の権頭もまた、碁に興じた姫君の面影を忘れられずに悲嘆にくれた。しかも、その詠歌の上の句「十廿三十」という数字は、【源氏物語】本文と一致している。

再び、【源氏小鏡】に目を転じてみよう。

碁。かいまみ。(中略)十とせ。廿はた。三十みそ。四十よせ。劫。

(京都大学本「源氏小鏡」空蟬)

即ち、「碁」も「十、廿、三十」も、空蟬ゆかりの源氏寄合であった。【鼠の草子】の碁の歌は、この寄合を忠実に詠み込んで一首に仕立てられている。無論、【源氏小鏡】には「人がら」の歌も載る。

【源氏小鏡】は成立以来、多くの読者を獲得したが、恐らく、【鼠の草子】の作者もそうした一人であり、【源氏物語】に関する知識を有し、寄合にも通じていたのである。

【鼠の草子】が詠じた「乱れ碁」は、「らんご」「らご」とも呼ばれる伝統ある遊びであった。詳細は不明ながら、指で碁石を押し拾ったり弾いたりして、それぞれが得た石の数で勝負を決めたという。【枕草子】は「古めかしけれど」と断った上で、「らんご」を女の遊びの一つとして挙げる。

女のおそびは、ふるめかしけれど、らんご、けうとき、双六、はしらき、へんつくもよし、

(前田家本【枕草子】第八七段)

乱れ碁は広く楽しまれたらしく、

宮の御方にうへおはしまして、らごとらせ給ひて、かたせ給へるかちわざ、六月十六日にうへせさせ給ふ、

(円融院扇合)

天禄四年五月廿一日、円融院のみかど一品宮にわたらせ給ひて、らんごとらせ給ひけるまけわざを(後略)

(拾遺集 雑秋・一〇八八詞書)

さざれ石まきて、乱碁拾ふ音など聞えけるをぞ、

(今鏡 巻七)

貝おほひ、石などり、碁、らんご、双六(中略)たゞ遊びたはぶれにて、大人も若きも明かし暮らす、

(たまきはる)

乱碁、貝おほひ、手まり、へんつきなどやうのことどもを、おもひくにしつゝ、

(増鏡 上 第五)

など、諸書に乱れ碁の記録が散見し、息長く伝えられた遊びであったことを知る。

しかし、室町から近世にかけては、乱れ碁は女房の優雅な遊びというよりも、賭事に用いられる遊戯となっていた。

しばしば争いの種として俳諧連歌に詠まれ、錯刀を賭ける親不孝者まで出る為体であつた。

石の上にも世をぞいとへる

みだれ碁にわが生き死にのあるをみて 権大僧都心敬

花たちばなのうちかほる陰

仙人や碁に生死をわするらむ 宗砌法師

あらせへる心の馬ののり物に

かちたるかたのいさむ乱れ碁 よみ人しらず

時を忘れつ打ハちやうはん

みたれ碁のあらせひもまた果てずして

よきをかまゆるミネの柚人

うちわらひつゝする物がたり

孝行ハ夢もうつゝに覚えもの

さつとまけたる乱れ碁のすゑ

故塚によりそひぬるは孝なれや

錯びたる刀かくる乱れ碁

【鼠の草子】の作者は『源氏物語』の優美な世界を背景としつつ、賭事として楽しまれた「乱れ碁」を詠み込むこと

によって、この一首に俳諧味と当代らしさを持たせることに成功している。

〔新撰菟玖波集〕卷十五

〔寛永十三年熱田万句〕第四十六

〔同第五十五〕

〔同第八十一〕

【鼠の草子】は異類婚姻譚という伝統的な主題を軸とし、民間伝承「鼠の浄土」「見るなの座敷」とも通じ合う世界を内包する物語であった。見事な婚礼の行列と豊かで楽しげな宴のさま、鼠たちの歌う室町小歌や活気あふれる会話を辿るうち、読者は鼠の隠れ里へと誘われてゆく。この作品は、人間が留まり得ない異郷への訪問譚として捉えることができる。

それでは、そうした伝承的世界と室町物語との差異は奈辺に求められるかといえ、それはやはり、室町物語には当時の学芸や教養が盛り込まれた点にある。就中、【鼠の草子】に収められた形見の和歌には、作者の教養が凝縮されている。とりわけ、【源氏物語】はこれらの歌を詠む際の礎となっていた。換言すれば、【源氏物語】が幅広い読者層を獲得した時代であればこそ、この【鼠の草子】は生まれ得たのだともいえよう。

古雅な挿絵の魅力と相俟って、異類物を代表する佳品と称される【鼠の草子】であるが、そこには【源氏物語】をめぐる作者の教養が確かに息づいている。

〔注〕

(1) 以下、「熱田万句」の引用は、熱田神宮神宮文化叢書第六「寛永十三年熱田万句」(一九七八年、熱田神宮宮庁)による。  
(2) 『佐竹昭広集 第三巻 民話の基層』(二〇〇九年、岩波書店) 参照。ブルーノ・タウト「日本の四季」(『忘れられた日本』所収)は、いかに日本人にとって鼠が親しい存在であったかを物語っている。

日本人が鼠をいけば家畜同様に心得ていることは殆んど疑いをいれる余地のない事実である。旧い芸術品を鑑ると、鼠は人間の敵どころかむしろ人間の友達として表現せられている。鋳物の見事な燭台には、鼠の彫刻がついている。木版画を見ると福德神の大黒様が両手に一つずつ輪をもって鼠の方に向けている、鼠はこの輪をくぐって大黒様のキモノの広い袖のなかに跳び込むのである、—これはヨーロッパ人の眼から見ると実にたまらない例錯だ。また「鼠の嫁入」の絵もあれば鼠を主題にした音楽もあり、そのほかにもこの動物に対して親愛の情を示した作品が数多くある。子供達は夜寝る前に、鼠が天井裏でがたがたあばれているのを聞くとうっとりとした気持になる、そして彼等は言うのである、「鼠さんが遊んでるよ」。私達はどこかで時々この鼠たちに確かに餌をやっているに違いないと思うようになった、—もちろん毒の入った餌のことではない。

(ブルーノ・タウト「日本の四季」春)

また、中勘助の信心深い伯母は、白鼠をこの上なく大切にしていたという。

いっぞやなどは 白ねずみは大黒様のお使いだ といつて、どこからかひとつがい買ってきたのを お福様 お福様 と後生大事に育ててたが、ねずみ算でふえるやつがしまいにはぞろぞろと家じゅうはいまわるのをおめだがつて、なにか事のある日には赤飯をたいたり一升枘に煎り豆を盛ったりしてお供えした。(中勘助「銀の匙」)

(3) 『鼠の草子』の引用については、『室町時代物語大成』(東京国立博物館本)、『天理図書館善本叢書 和書之部』

第八卷 古奈良絵本集一(天理図書館本・同別本)、日本古典文学全集『御伽草子集』(サントリー美術館本)、ダグラス・ミルズ「鼠の草子 翻刻」(『国文学研究資料館紀要』第五号所収、一九七九年三月)による。本稿では、特に断らない限り、サントリー本を引く。また、『在外奈良絵本』(一九八一年、角川書店)、吉行淳之介「お伽草子 鼠の草子」(一九八二年、集英社)、佐竹昭広先生ほか編「鳥獣戯語」(一九九三年、福音館書店)、『鼠の草子』(二〇〇七年、サントリー美術館)、大島建彦「お伽草子と民間文芸」(一九六七年、岩崎美術社)、滝澤彩「甲子園学院所蔵「鼠の草子絵巻」について」(『金鯨叢書』第三十四輯「史学美術史論文集」所収、二〇〇八年三月)など参照。なお、フォグ美術館本など「鼠の草子」と称する別種の商品があるが、権頭の物語ではないため、今は措く。

(4) 百二十歳は人間の寿命の上限であった。『万葉集』巻第五「沈痾自哀文」・八九七番細注に所見、室町物語にもしばしば百二十歳の人物が登場する。新日本古典文学大系『萬葉集』一、拙稿「梟の懸想文―越後米山薬師のこと―」(『説話論集』第十一集所収、二〇〇二年、清文堂出版株式会社)参照。

(5) 引用は「大藏家伝之書 古本能狂言」第二巻(一九七六年、臨川書店)による。

(6) この場面に所見の室町小歌や芸能、婚礼行列については、真鍋昌弘「『鼠の草子』に見える小歌」(『国文』研究と資料)第三号、一九七九年三月)、落合博志「『鼠の草子』の能役者」(『能楽タイムス』三八六、一九八四年五月)、小野恭靖「絵の語る歌謡史」(二〇〇一年、和泉書院)、沢井耐三「『鼠の草子』(鼠の権頭)」の嫁入り行列図―諸本比較の過程から(承前)―」(『愛知大学文学論叢』第一三六輯、二〇〇七年九月)、同「『鼠の草子』(鼠の権頭)」の女性と笑い―諸本比較の過程から―」(『愛知大学文学論叢』第一三五輯、二〇〇七年二月)など参照。画中詞に見られる東国方言については、出雲朝子「中世末期における東国方言の位相―『鼠の草子絵巻』の絵詞をめぐって―」(『国語と国文学』第七十二卷第十一号、一九九五年十一月)、同「『鼠の草子絵巻』諸本の画中詞における人称語と敬語―性

差の観点を中心に——〔青山学院女子短期大学紀要〕第五十号、一九九六年十二月）、徳田和夫「東日本の在地と伝承——室町後期の『鼠の草子絵巻』にみる東国文化——」〔講座日本の伝承文学 第七巻 在地伝承の世界 東日本〕所収、一九九九年、三弥井書店）等々参照。

(7) 桜井健太郎氏は、国文学研究資料館にマイクロフィルムが所蔵されている。フィルム番号サ——一九。青山歴史村の所蔵本については、相原豊『篠山本鼠草紙』（二〇一〇年、三弥井書店）参照。

(8) 以下、「湯山聯句鈔」は新日本古典文学大系、甫庵本「信長記」は古典文庫による。

(9) 「義経記」巻第四「土佐坊義経の討手に上る事」では、土佐坊は油小路に宿所を定めている（岡見正雄校注、岩波古典文学大系「義経記」参照）。「雍州府志」巻六によれば、「白醴酒」は所々に名店あり、その一つに油。小路出水通の北の酒店があった。また「山川酒」は六条油。小路の酒店の名酒であった。

(10) 酒店に縁ある白鼠の話は近世の随筆にも書き留められている。

本市場吉原と蒲原の間なる酒店に万屋三左衛門 近年白鼠多くありと聞し故立ちよりぬ、(中略) 此の家の主始めは世に貧しかりしが、白鼠出でしより漸々富み待るとなん、  
(名古屋叢書所収『塩尻拾遺』巻八十八)

酒蔵の白鼠なり上野の花 (延宝六年「広小路」(山本唯一「俳諧江戸広小路」一九八四年、文栄堂書店))  
(11) 継子立てとは、黒白の碁石を妻子と継子に見立て、各十五個ずつ並べ、十番目に当たる石を取り除いていく遊びである。並べ方により、いずれかの石をすべて取り除くことになる。『徒然草』第百三十七段では、死を遁れ得ぬ譬えとして引用される。

若きにもよらず、強きにもよらず、思ひかけぬは死期なり。今日まで遁れ来にける、ありがたき不思議なり。しはしも世をのどかに思なんや。継子立てといふ物を双六の石にて作り、立て並べたるほどは、取られん事はいづ



れの石とも知らねども、数へ当てて一つを取りぬれば、その他は遁れぬと見れば、又く数ふれば、かれこれまぬきゆくほどに、いづれも遁れざるに似たり。  
 【徒然草】 第三百三十七段

(12) 『狭衣物語』は「はやき瀬の底のみくづとなりきと扇の風にふきもつたへよ」の一首が見え、『物語二百番歌合』九十二番にも「右 ふねのうちにて あすかる はやきせのそののみくづとなりきとあふぎの風にふきもつたへよ」と引用されている。下の句は『鼠の草子』『扇』の和歌に似る。

(13) 徳田和夫『扇の草紙』絵巻をめぐって(序説)(『国語国文論集』第二十号、一九九一年三月)は、天理本と東博本『鼠の草子』の和歌について、「画中詞(絵詞)の自由裁量がいいた部分」である可能性を指摘、扇絵などとの関連性を説く。併せて渡辺匡一『鼠の草子』―絵と詞書、画中詞の関係から―(『解釈と鑑賞』第六十一巻第五号、一九九六年五月)など参照。

(14) 類題集が室町物語の成立にも影響を及ぼした例は、拙稿『異類の歌合と『夫木和歌抄』(夫木和歌抄研究会編『夫木和歌抄 編纂と享受』所収、二〇〇八年、風間書房)参照。

(15) 大阪俳文学研究会編『藻塩草』本文篇及び作品篇(一九七九年―一九八三年、和泉書院)参照。

(16) 引用は『中世の文学 連歌論集(一)』(一九七二年、三弥井書店)による。

(17) 天理図書館本は、サントリ一本とは対照的に『連珠合璧集』が挙げる寄合を殆ど踏まえていない。『連珠合璧集』は『源氏物語』に基づく寄合が多く載ること知られるが、その点でも『鼠の草子』両系統の和歌の相違が際立つ。

(18) 以下、『源氏物語』は新日本古典文学大系『源氏小鏡』は『源氏小鏡』諸本集成(二〇〇五年、和泉書院)による。

(19) 『竹林抄』巻第八・雑連歌上、「寛永十三年熱田万句」には、須磨の松風も詠まれている。

遙にも聞くは筑紫の国なれや

琴の音通ふ須磨の山陰 賢盛

誘へや山の奥の松風

かつらこそ琴のおのれの調べなれ

玉づさに取そへてやる琴ならし

ちぎりのすゑを庭に松風

いやよ／＼ねられぬ恋を須磨の浦

神なりやミて霧もはれたり

花も今須磨の若木の咲時分

ゆらりとかよふ松のうら風

湊に久し天氣まつ船

あられなく波打よする須磨の浦

何れも山ハたえぬ松風

(20) 以下、引用は「物語二百番歌合 風葉和歌集桂切」(日本古典文学影印叢刊十四、一九八〇年、貴重本刊行会)、「新撰菟玖波集 實隆本」(一九七〇年、角川書店)、「十本扇」は「室町時代物語大成」による。

(21) 彰考館蔵「調度歌合」では、碁盤が「目にも今みる心地して乱れ碁の打ちも忘れぬ面影はうし」と詠じ、「心玉集」には「ミだれ碁をうつそのまにハかう有て」「石をもつくすあまの羽衣」と見える。「熱田万句」には、ほかにも乱れ碁の句が収録されている。

うちつけハとかく心をとるかねて

(「寛永十三年熱田万句」第十)

(「竹林抄」)

(同第十七)

(同第二十一)

したひつくにぞむかふみだれ碁

山寺の児と法師のあそびわざ

詩と短冊八月にかけもの

何番も勝つばかりなる乱碁に

力もつよくいきる仙人

まけかちもなき碁どころの碁

いくさ場ハかう成武者のおあつかい

たまさかにあふともとちも手を打て

また負勝もしれぬみだれ碁

月をも友に遊ぶ仙人

露程もやすむまもなき碁すきにて

みたれ軍に多きいきしに

延宝七年刊『付合小鏡』雑部三十八「碁」は、「一碁 乱碁 あらそふ碁 むかふ乱碁」と付合を列挙している。

(同追加第八)

【付記】

本稿は、国文学研究資料館の基幹研究「王朝文学の流布と継承」(二〇〇六年度～二〇一〇年度)の研究成果である。なお、引用文については、通読の便と考え、適宜、漢字をあてるなどした箇所がある。

(寛永十三年熱田万句)第五

(同第三十三)

(同第五十六)

(同第七十五)